

美里町フットパス事業にみる住民参加の進展に関する研究

川上 友貴 (熊本大学 大学院自然科学研究科, 148d8812@st.kumamoto-u.ac.jp)

田中 尚人 (熊本大学 政策創造研究教育センター, naotot@kumamoto-u.ac.jp)

坂本 政隆 (神戸市役所, masataka_sakamoto@office.city.kobe.lg.jp)

Study on development of participation in Misato footpath project

Yuki Kawakami (Graduate School of Science and Technology, Kumamoto University)

Naoto Tanaka (Center for Policy Studies, Kumamoto University)

Masataka Sakamoto (Kobe City)

要約

近年、時代の変化と共に社会的繋がり希薄化が問題とされている。そのため、良好なコミュニティ形成を目指して住民参加の重要性が指摘されているが、住民参加の具体的な手順や重要な要素については諸説ある。近年では、まちづくりの文脈で「地域のありのままの姿を楽しむ」、「地域を見直すきっかけ」としてフットパスが注目され、全国で実施されている。九州でも多くの地域がフットパスに取り組んでおり、その中でも美里町では「美里方式」とも呼ばれるほど独自のフットパスを展開し、住民主体で取り組んでいる。そこで、本研究では熊本県下益城郡美里町のフットパス事業に着目し、コースづくりと運営システムの二つの視点から、事業が実施されるにつれ進展する住民参加を分析し、住民参加の進展に有益な要素を抽出することとした。その結果、住民参加の進展には「実感」、「協働」、「継続」の三つの要素が重要となっていることがわかった。地域住民は、コースづくりをはじめ様々な場面での「実感」を得ることにより、活動を「継続」して行う活力を得ている。しかし、この二つのみでは住民参加は成り立たず、基底には他者と役割分担し「協働」することがあり、それにより広く他者との関わりが生まれ、会話し、評価し、支え合い、全ての活動の根源となっている。美里町フットパス事業では「協働」を根底とし「実感」と「継続」を実現させる、優れた「場」が継承されていると言える。

キーワード

まちづくり, 住民参加, フットパス, エリアマネジメント, 美里町

1. はじめに

1.1 研究の背景と目的

現在、時代の流れと共に伝統的価値観が薄れ、人々の暮らしが変化し、従来の社会的な繋がりが希薄化してきている。そのため、近年では良好なコミュニティ形成を目指して住民参加のまちづくりが叫ばれてきた(伊藤・大久手計画書房, 2003, pp.13-14; 世古, 2009, pp.15-16)が、具体的にどのような手順で進めるのか、いかなる要素が重要であるのかは諸説広がりを見せている。日本では1990年代に入って、参加型まちづくりが実践されてきており、その中でも近年、「地域のありのままの姿を楽しむ」、「地域を見直すきっかけ」としてフットパスが注目を集めている。

そこで本研究では、熊本県下益城郡美里町において実施されている、「美里方式」のフットパス事業を通じたまちづくりを対象に、住民参加の進展についてその過程を詳細に分析することにより、フットパス事業のいかなる要素が住民参加に影響を与えるのか、住民参加の進展に有益な要素を抽出することを目的とする。

1.2 フットパスの概念と既往研究

「フットパス」とはイギリスを発祥とするもので、土地の所有権とは無関係に人々が歩く権利(Rights of Way)を有する道を指す言葉である。元々、イギリスではウォーキングが国民的なレクリエーションであったところ、18世紀から進行していた囲い込みによる一方的な道の閉鎖などに対し、労働者が抗議運動を起こしたことにより貴族は、都市部のコモンランド(共有地)のオープンスペース化と、周縁の私有地におけるウォーキングを中心としたレクリエーションを行うことを認めることとなった。つまり、この貴族などの大土地所有者に対する市民の抵抗、所有権に対する市民的アクセスの権利主張が、イギリスのフットパスの起源になったと言える(平野・泉, 2012, pp.127-140; 平松, 2002, pp.12-78)。

このようなイギリスのフットパスを基に、日本では独自のフットパスが展開してきていると言われているがその詳細についてはここでは省略する。日本フットパス協会では「フットパス」という概念について、イギリスを発祥とする「森林や田園地帯、古い街並みなど地域に昔からあるありのままの風景を楽しみながら歩くこと【Foot】ができる小径【Path】」と説明される。

これまでのフットパスに関する研究では、フットパス事業を地域活性化の手段として位置付けるものが数多くある。例えば、谷口らは、フットパスマップを作成することにより地域のまちづくりへと繋がることを考察し

ている（谷口他，2011）。また、鳥谷部らは、現地調査や既往のフットパス事業を調査し、社会資本の利活用という視点からみたフットパス事業の現状と課題について考察した（鳥谷部他，2010）。行政や地域住民等のアクターに関する研究としては、平野らが、「フットパス周囲の居住者数」と「地方自治体の積極性」の二つを軸に自治体、民間組織、居住者、訪問者の四つのアクターが織りなす関係を具体的な事例を基に明らかにしている（平野・泉，2012）。また、住民参加に関する研究において、樋口らは、二つの地方幹線道路拡幅事業に着目し、住民、行政、コンサルタント等の関係者へのヒアリングを基に、市民参加の取組の意義とそのあり方について考察している（樋口他，2005）。

1.3 住民参加の定義

本研究では、Feingdd, E. や Sherry R. Arnstein（厚生省，2000）の参加の定義を参考に、地域住民がまちづくりに加わる過程における参加を想定し、その段階を次のように定義する。

ここでは参加（v）の段階に達すると住民自治に到達すると考え、本研究では特に参加（i）から参加（iv）の段階における「参加の構造と過程」を考察する。

表 1：参加の段階表

進展する方向	(i)	知る
	(ii)	意見を聞く，言う
	(iii)	活動する
	(iv)	パートナーシップ（協力関係）
	(v)	住民によるコントロール

2. 美里町におけるまちづくりの概要

2.1 美里町の概要

研究対象地である熊本県下益城郡美里町は 2004（平成 16）年 11 月 1 日に中央町と砥用町が合併して誕生した。合併時の人口は 12,849 人、面積は 144.03 km² となっている。美里町は、熊本県、また九州の中央付近に位置しており、熊本市から南東へ約 30 km の距離にある自然豊かな地域である。地勢は山地丘陵部が多く、総面積（144.03 km²）の約 4 分の 3（107.59 km²）を森林が占める中山間地域である。住宅地は地域を東西に横切る国道 218 号等の主要道路に沿って点在し、農地の大部分が丘陵地で棚田として利用されている。南部地域には標高 1,000 m 級の山岳が連なり、一部は九州中央山地国定公園や県立自然公園にも指定されている。更に、一級河川である緑川とその支流を多く抱え、流域には緑川ダムや船津ダムがある地域でもある。

美里町の人口は 10,784 人（2013 年 10 月 1 日現在）、高齢者率 40.0 % であり、山々に囲まれた土地属性とも相まって、中山間地域によくみられる少子高齢化、人口減少の問題を抱えている地域である。

2.2 まちづくりの履歴

2.2.1 ステイクホルダー

本論の対象地である美里町におけるまちづくりのステイクホルダーは、①地域住民、②役場行政職員、③他の地域及び美里町住民の参加もある美里フットパス協会（以降、文中では「協会」とする）などのアソシエーション、最後に、④観光客、の四つに大別される。

2.2.2 フットパス事業導入前のまちづくり

フットパス事業導入以前にも美里町にはまちづくり、地域おこしの兆しが見られ、例えば、2006（平成 18）年には 20 年ぶりに新嘗祭に献上する米や栗の献穀事業が、2007（平成 19）年には 15 年ぶりに十五夜大綱引きがあるなど、地域の行事が復活していた。また 2005 年には、美里ドームから B & G 海洋センターまでふれあいナイトハイクを行うなど、フットパス導入以前から歩くことを対象にした行事も存在した。

例年の行事としては、1 月に緑川ダムイベント広場にてどんど焼き、3 月には甲佐嶽登山マラソン、緑川ダム湖周辺にてウォーキングやジョギングを行うさくら健康フェスタ、7 月には御輿を担いだり地区対抗綱引き大会が行われるふるさと祭りがあり、8 月には仮装行列や花火が上がるやまびこ祭り、11 月には日本一の段数を有する 3333 段の石段を登るタイムを競うアタック・ザ・日本一が開催されている。

このように、フットパス事業導入以前にも地域の行事や活動が見受けられるが、いずれも特定の日のみ人々が集まる一過性のイベントが多かった。

2.2.3 フットパス事業導入の契機

美里町において、初めてフットパスの存在を広めるきっかけをつくったのが、現在美里 NPO ホールディングス理事長を務める濱田孝正氏である。その経緯も含め、フットパス事業導入の経緯を表 2 に整理した。濱田氏は、2010 年 5 月号の小学館の「Be-PAL」でフットパスの記事を目にした際、記事にある写真を見て「もっと良い風景が美里には残っていると直感」したという。また「フットパスがイベント型ではなく日常型である」点に惹かれ、美里町でフットパスに取り組むことを決めた。美里町は風景の良さだけでなく、住む人の良さもあることから、フットパスを契機として来訪者に地域住民と触れ合ってもらうことが美里町の魅力の発信につながると考えたためである。

日本では、地方分権や住民自治への取組などの社会的背景を受けて、住民自らが地域の課題を解決し、住民のニーズに応じたまちづくりを推進していくことを目的として地域自治振興事業が取り組まれている。同様に、美里町でも地域振興の具体策について議論がなされていた。

美里町は九州の中央に位置し、素朴で自然が卓越した風景やそこに住む人柄の良さが魅力としてあるが、観光客の滞在時間が短いためその魅力が十分に伝わらないとされ、また各集落の人口減少も深刻な状況であった。こ

表 2：美里町フットパス事業導入の経緯

年代	出来事
2010 年 5 月	濱田氏が小学館の「Be-PAL」でフットパスの記事を発見 (イギリスの事例と日本の町田の事例)
2010 年 5 月	美里 NPO ホールディングスが九州で初めて日本フットパス協会に加盟 「九州環境教育フォーラム」において、フットパスが九州全域へ拡散し始める
2010 年秋	濱田氏、全国フットパスシンポジウム（北海道）に単身参加 東京都町田市、山梨県甲州市、北海道などとネットワークを形成
2011 年 3 月	美里 NPO ホールディングスが町内でテストコースを作成 (二俣橋コース、霊台橋コース) を選定しマップを作成
2011 年 7 月	地域振興協議会設立 (以降、商工会とともに、美里 NPO ホールディングスによるフットパス事業に取り組む)
2011 年～ 2012 年	地域振興協議会が 2011 年に 5 コース作成（小崎、大井早、畝野、砥用、二俣） 2012 年に 5 コース作成（柏川、霊台橋、岩野、白石野、堅志田） 商工会がフットパス弁当の考案、ウォーキングイベントの考案、 物販（フットパスタオル、パスポート、缶バッジ）の考案 雇用促進協議会が「ガイド養成講座」と「おもてなし講座」を開催
2012 年 10 月	親子フットパス@畝野コース（モニターツアー） 福岡フットパス@霊台橋～二俣橋（モニターツアー）
2012 年 11 月	実りの秋フットパス@小崎棚田コース（モニターツアー）
2012 年 12 月	たかんぼ飯フットパス@堅志田城下ため池コース（モニターツアー）
2013 年 3 月	地域振興協議会が解散
2013 年 4 月	美里フットパス協会設立
	以降、順次イベント等開催

のような状況を打破するため、美里 NPO ホールディングスをはじめ、商工会の若手、地域住民の若手を中心に地域振興のための勉強会が月 1 回行われていた。その際、濱田氏からフットパスの提案があり、「滞在時間を長くして美里に住む人の良さを知ってもらいたい」と考えていた勉強会のメンバーは、フットパスが解決策となるのではと考えた。

フットパス事業導入に向け動き出すための準備段階として、地域の力を活かして地域の課題解決に取り組む全国展開プロジェクト事業に参加することとし、2011（平成 23）年 7 月に美里フットパス協会の前身となる地域振興協議会が設立された。当協議会は 2 カ年事業とし、その間に、美里 NPO ホールディングスに事務局として支えられながら、主にコースづくりとマップ作製を実施、その後、美里フットパス協会へと移行された。また、商工会も同じころ 2 カ年事業として予算を確保し、主にフットパスイベントや「フットパス弁当」、特産品開発等を実施した。

2.2.4 フットパス事業導入後のまちづくり

フットパス事業導入後、以前から行われていた美里町のお祭りやイベントと連携した取組が進んでいき、2013（平成 25）年には美里町の行事と組み合わせたイベントも開催されることとなった（表 3）。また、美里町の東部地区では、地域経済の活性化や地域コミュニティの維持に向けた「絆の里づくり事業計画書」づくりが行われたが、この計画の中にもフットパス活動に参加する取組などが



図 1：小崎棚田コース



図 2：フットパスの様子

表 3：フットパス導入後のまちづくり

年代	出来事
	美里フットパス協会設立
	フットパス弁当打ち合わせ会議
2013 年 4 月	フットパスイベント（堅志田城下ため池コース）
	フットパスイベント（大井早そよ風コース）
	グループウォーキングの開催（小崎棚田コース）
	グループウォーキングの開催（小崎棚田コース）
2013 年 5 月	フットパスイベント（壺台橋石橋コース）
2013 年 6 月	美里フットパスマップの販売
2013 年 7 月	フットパスイベント（柏川井出コース）
2013 年 9 月	フットパスイベント（白石野里山コース）
	フットパスイベント（小崎棚田コース）
2013 年 10 月	佐俣の湯温泉祭り（岩野用水コースのフットパスイベント後）
	グループウォーキングの開催（柏川井出コース）
2013 年 11 月	美里町にて全国フットパスサミット開催
	第 15 回みどりかわ湖どんと祭り（畝野コースのフットパスイベント後）
2014 年 2 月	フットパスイベント（二俣橋コース）
2014 年 3 月	フットパスイベント（砥用まちなかコース）

注：■ 例年行われている行事とフットパスイベントとの連携

記載されている。

2.3 まちづくりにおけるフットパス事業の位置付け

美里町においてフットパス事業の導入後、美里 NPO ホールディングスをはじめ、地域振興協議会や商工会、後述する美里町雇用促進協議会といった地域の住民団体がフットパス事業に順次関わっていくこととなった。また、各種団体だけでなく、地域住民もフットパス事業に個人として参加する動きも広がった。前述した各行事やイベントとの連携の促進も進展し、フットパス事業は単体として美里町に導入されただけでなく、既存のまちづくりにおける手法の一環として展開していった。

以上のように、美里町では他の地域と同様に少子高齢化や人口減少といった過疎化の問題に直面する中で、滞在人口増加の期待及び地域の活性化を図ることを目的としてフットパス事業が導入されたことがわかった。また、フットパス導入後は、フットパス事業が単体として発展するだけではなく、既存のイベントや行事などと共存・連動する形で発展していったと言える。

3. 美里町におけるフットパス事業

次にここでは、美里町フットパス事業におけるコースづくりの手法とその運営システム及びそれらに対する住民の関係について整理する。具体的には、完成している 10 コースの実地踏査から概要と特徴を分析した上で、それらのコースでのイベントを含めフットパス事業全体の運営について整理する。なお、フットパスの導入にあたり、濱田氏及び区長が回覧板で地域住民にフットパスに関する情報を広めていた事実があるが、これについては後述（4

章 1 節）することとし、ここではそれ以降の動きとして、特に以下の 2 つの項目について詳細に説明する。

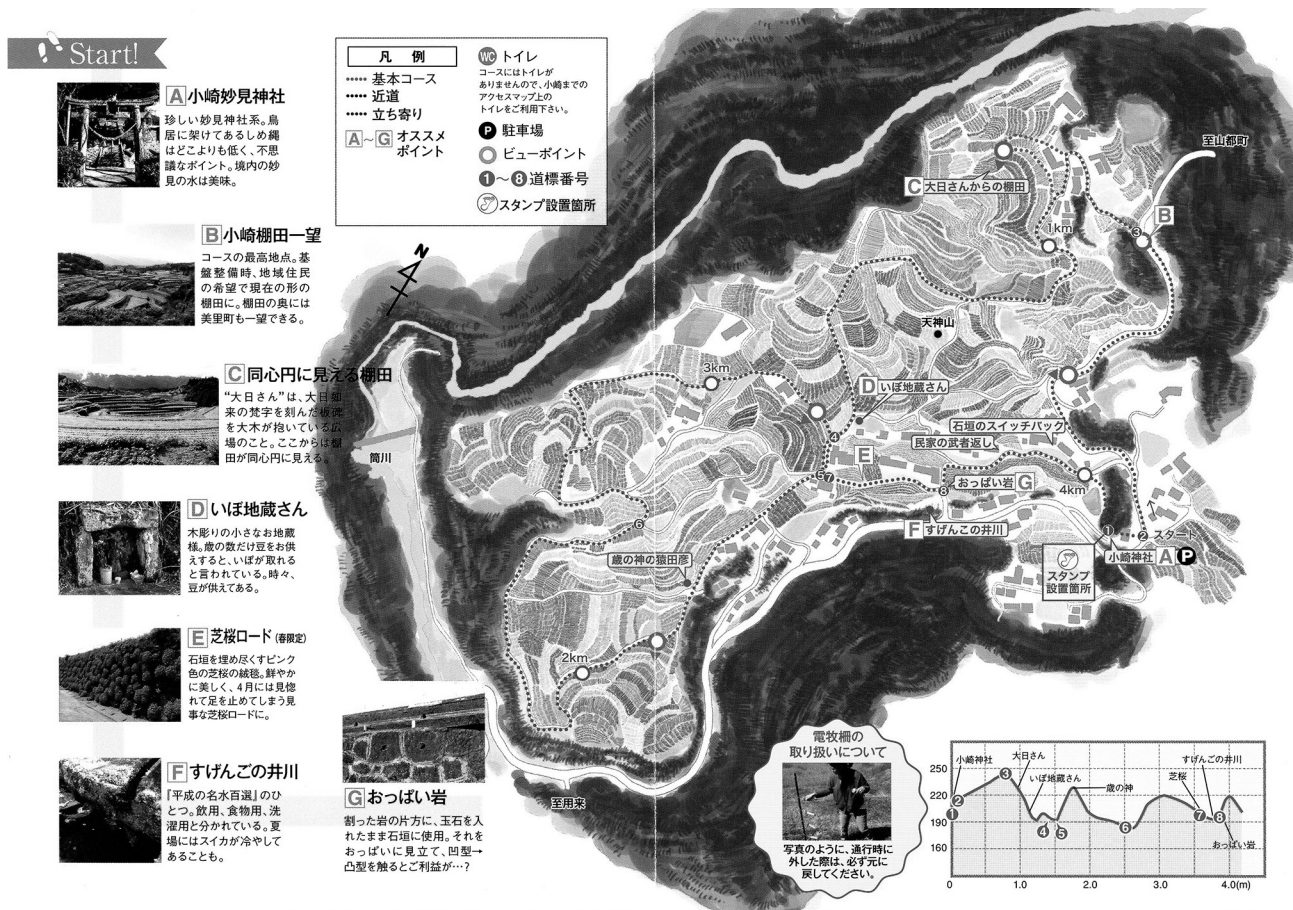
3.1 フットパスコースづくり

3.1.1 コースづくりの手法

コースづくりの手法に重要な要素としては以下の三つの要素が挙げられる。

一つ目は、「コースをつくる際に何度も地域を歩く」ことである。協会運営委員長の井澤り子氏によると、「何度も地域を歩きに行くことで、地域の方と会う機会が増え」、その際に地域住民と会い、「フットパスを説明して、美里町が今取り組んでいることを知ってもらおう」ことができるためである。また井澤氏は、「フットパスは昔からあるありのままの風景を楽しみながら歩く道のこと」であり、「ありのままの風景を維持し続けてきたのは、昔から住んでいる地域住民」であることから、フットパスにふさわしい道を知っているのは地域住民であると述べる。そのため、彼らと共にフットパスコースをつくらなければならないと考えられているのである。また、「ありのままの風景を維持してきた地域や道を歩かせていただくのだから、自分達はよそ者である自覚を持たないといけない」とも井澤氏は語っている。コースをつくる際によそ者であると自覚して歩くことで、普段見ないような風景に感動しやすく、コースを歩く人の視線でつくることのできるためである。

二つ目は、「坂道や回り道などをコースに取り入れる」ことである。これは、コースで見せたい風景であるビューポイントの前に坂や回り道などがあることでフットパスコースに期待感を持たせ、ビューポイントをさらに際立



たせる役割を有しているためである。

三つ目は、コースを歩く際にもコースに沿ってのみ歩くのではなく道草や寄り道を許容すること、また、道草や寄り道をしたくなる道をコースに選ぶことである。道草や寄り道をするにより、歩く人は自ら地域の楽しみ方や面白さを発見できるためである。その際には、魅力的なスポットをあえてコースに含まずマップへの記載に留めることが、寄り道を誘う有効な手法となる。

3.1.2 コースづくりへの気配り

さらに、コースづくりの細かな考慮事項としては、車の通らない道もしくは車の通行が少ない道を地域住民が自主的に整備し、そこをコースに入れている。また、コースの曲り角や小さな道へ入る際には迷わないよう、地面に矢印をペイントしたり（図4）、一定の間隔で電柱や木、看板などに目印のリボンをつける、案内用看板（図5）を設置するといったことを行っている。さらに、看板や目印の設置を必要最小限にすることで、土地所有者への配



慮とともに、歩く人に、迷ったからこそコースを見つける楽しさを与えている。

また、コースにはできるだけトイレと駐車場を設けることを心がけている。これは来訪者の利便性及び快適性を考慮したものである。美里町の場合は、コースを作ってもスタート地点に行くまでには、車かバスなどで移動する必要がある。そのためコースの起終点に既存の駐車場を取り入れている。トイレも同様に既存のものをコースに取り入れている。

3.2 フットパス事業の運営システム

3.2.1 運営主体

2013年4月に協会が設立される以前は、役場の支援を受けつつ、美里町の地域振興協議会、商工会、雇用促進協議会が共同でフットパス事業を進めていた。役場は運営には関与しないものの、他の町村と連携するための仕組みづくりや地域振興協議会への参加等、事業の取組に必要な支援を行っていた。その後、地域振興協議会が2012年度で解散し、2013年度に美里フットパス協会が設立された。協会設立後も設立前と同様に役場の財政的、人的支援を受けつつ商工会、雇用促進協議会と共同してフットパス事業が進められている。

その他、各運営主体の役割を整理したものが図6である。協会の内部にある「運営委員会」、「ガイド部会」、「縁側カフェ部会」については、雇用促進委員会が開催するセミナーに参加した人が所属する形となっている。フットパスイベント時には、ガイド部会がガイドを担当し、縁

側カフェ部会は公民館や自分の家の縁側でお茶や漬物を出しておもてなしをしている。このように、各主体の役割分けが明確であることが注目される。

3.2.2 役割分担の運営システム

美里町フットパスにおける運営システムとしては、全体の統括を協会の運営委員会が担いながら、同時に図6で整理したように地域住民が主役となり、商工会、雇用促進委員会の各主体が協働し、役割を分担して運営を行っている。また、適宜役場の支援を受けながら進めている。具体的には、まず、地域振興協議会がコースを作成し、その後イベントなどを商工会が開催、そこで雇用促進委員会でセミナーを受けた地域住民の所属する協会のガイド部会、縁側カフェ部会、及びどの組織にも所属していない地域住民がイベント参加者をもてなす、といったシステムとなっている。その他にも、地域振興協議会がFacebookページを制作し広報を務めたり、商工会がフットパスに関わるグッズや「フットパス弁当」の開発を行ったり、コースに必要な看板の設置には役場の支援を受けながら各種の制度を利用し補助金を活用するなどしている。

3.2.3 運営システムの具体的内容

運営システムの具体的な内容としては次のようになる。一つ目にコースの維持については、コースを作る際に意見を出した地域住民が「自分が教えた道だから」という意識から自主的に草刈や倒木の除去などのコース整備

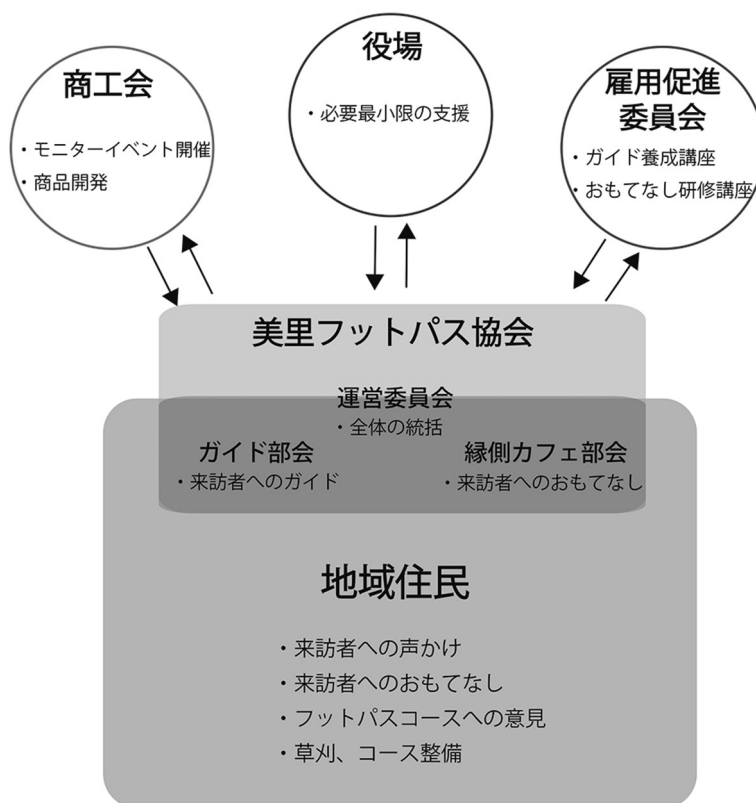


図6: 運営主体の協働

を行っている。また、小崎棚田コースでは、地域住民がこれまでは他者の田畑が荒れていても「他人の土地だから触ってはいけない」と手を付けていなかったが、フットパスを導入したことで外部から多くの人が歩きにきたことから、「せっかく来てくれるのだから綺麗にしよう」と地区の住民全員でその土地に生えていた竹の伐採や草刈りなど清掃を行ったこともあった。他方、井澤氏によれば、たとえ役場や来訪者の方から協会側へコースの草刈などの整備をして欲しい旨の要望があったとしても、協会はあくまで統括的な運営を担っているために、「自分たちが整備するのではなく、主体である地域住民の方に伝えるだけ」であり、「そこで草刈をするかしないかは地域住民の方による」として、各主体の役割分担の重要性が示されている。

二つ目におもてなしについては、協会への所属如何に関わらず、一定の「おもてなし」の方法、具体的には緑側カフェとガイドにつき最低限のルールを教われば地域住民は自由に「おもてなし」が出来るようになっている。このような地域住民による「おもてなし」及び来訪者への「声掛け」により、美里町のフットパスにはリピーターが多い現状である。来訪者や地域住民へのヒアリング調査によれば、来訪者からは「ただ歩くウォーキングとは違い、歩いている時に地域住民の方に声をかけてもらえるのが嬉しい」、「美里の地元料理も食べることが出来る」のが良いという意見が挙げられており、他方、地域住民からは「外部の人と話せて楽しい」という意見があった。

このように、フットパスの要とも言えるコースづくり・整備と「おもてなし」は基本的に地域住民自身が行っており、そのため来訪者からの評価や意見が直接地域住民に伝わるようになっている。その上で、運営の中で地域住民だけでは出来ない事は役場が手助けし、加えて協会が全体の繋ぎ役となりながら商工会や雇用促進委員会を含めた各主体との協働が行われている。

3.3 フットパス事業に対する地域住民の関与

3.3.1 事業に対する住民参加のきっかけ

地域住民がフットパス事業に参加するようになったきっかけについては様々である。いくつか例を挙げると、井澤氏によるフットパス事業の説明を聞いたことにより参加しようと思った者、コースづくりの際に何度も地域を歩いていた井澤氏をはじめとする地域振興協議会のメンバーに会い、話を聞くうちにフットパスについて知り、関わるようになった者、もともとフットパス事業に参加していた友達に誘われた者、地域の別の活動をしていたところフットパスでもそれを活かしてほしいと誘われた者、美里町の広報で知った者、美里町のフットパスイベントに参加して興味をもった者、などがある。

フットパス事業を広報する側の視点としては、地域住民に伝えていくためには、説明会等を開催して来てもらった上で、一方向から伝えるのではなく、個別に集落を訪問し説明することが重要である、と井澤氏は話す。特に美里町では、集会や地域の集まりには男性が参加し、女

性は家にいて参加した男性から話を聞くという現状がある。そのため、フットパス事業において重要な役割を果たす女性達にその魅力を伝えるには個別に集落を訪れ、話すことが重要な方法となるのである。

3.3.2 フットパス事業を通じ地域住民が得た学び

フットパス事業に参加する地域住民の方々にヒアリングを実施したところ、以下のような意見が多く得られた。地域住民は、外の人と交流ができることにより、「自分の作った野菜やお漬物を出した時に「美味しい」と言ってもらえて嬉しい」、「「ごちそうさまでした」と言ってもらえると「またやろう」という気持ちになる」、「ばあさんでもわくわくする」、「人が来たら元気になる」といった気持ちを持ち、フットパスに参加し続けている。また、フットパスのコースを地元の人しか知らないような場所に設定することにより、住民でも「こんな自然豊かな所に住んでいたんだというのが改めて分かりました」、「裏道を歩くことで改めて美里町の良さが分かった」、「生まれ育った町を見直すいい機会になりました」との意見があった。このことからわかるように、フットパス事業が地域住民による自身の住む地域を見直すきっかけとなっており、地域住民にとっても自身が長年住んでいた地域であっても知らない事を発見でき、楽しい、面白いと感じていると言える。

4. 住民参加の進展とフットパスに関する考察

ここでは、1章3節に示した住民参加の定義に照らし合わせ、美里町フットパス事業を通じた住民参加について、コースづくりという空間整備に関する参加と、運営システムというおもてなしや労働に関する参加から考察する。また、フットパスの効果と住民への影響についても考察する。

なお、本論文における参加の各段階の判断については、フットパス事業での分析であることからそれぞれ、参加(i)「知る」については、「フットパス」という言葉を認識しているか否か、参加(ii)「意見を言う」は、単なる批判で終わるものではなく、自分の考えや建設的な意見を述べているか否か、参加(iii)「活動する」は、実際にフットパス参加者と関わったりおもてなしをしたり、コース整備その他フットパス運営に関わる活動をしているか否か、参加(iv)「パートナーシップ」は、活動が単発で終わるものでなく継続的に各ステイクホルダーの交流・協力が行われているか否か、で判断するものとする。

4.1 コースづくりに関する考察

協会が、コースづくりの際に何度も地域を歩くことで出会った地域住民に昔の道を教えてもらう一方で、協会側からはフットパスに関する情報の発信がなされた。これは、前者がボトムアップ型、後者がトップダウン型の情報発信だと考えられる。加えて、フットパスの広報には濱田氏が区長会議等様々な機会においてフットパスを説明し続けたこと、それにより区長が回覧板を使って地

域住民に広報をしており、これらもトップダウン型の情報発信だと言える。また、美里町の場合、フットパスを理解して協力してもらえ人がある地域から、順次コースを作っていった。そしてモニターツアーを行い、そのことが広報に載り、地域の中でフットパスの話が広まっていった。このようにボトムアップ型とトップダウン型の2種類の方法により、地域住民全体にいち早くフットパスに関する情報が広まった。

この2種類の情報発信が参加 (i)「知る」ことを促進させていると考えられる。特に美里では「フットパス」という言葉を「知る」、つまり「認識する」だけでなく、多くの地域住民がフットパスで具体的に「何をしているのか」を大まかにでも理解をしている。そして、協会が何度も歩きに行き、地域住民とコミュニケーションを取ることで、地域住民は昔の道やその地域特有の面白い道を教えてくれるようになる。これはフットパス事業に対し批判に終わらず、自分の考えや建設的な意見を述べていることから参加 (ii)「意見を言う」につながる。また、自身の教えた道が実際のコースに取り入れられると、地域住民の中には「自分が教えた道だから」という理由で道を整備し、草刈を行う人も出てきた。これはフットパスコースの整備を行っていると言え、参加 (iii)「活動する」につながる。

以上から、美里町におけるコースづくりの方法は、参加 (i) から参加 (iii) の段階への促進に影響を与えていると言える。

4.2 運営システムに関する考察

美里町のフットパス事業には最も大きく分けて三つの主体、すなわち地域住民、アソシエーション、役場という主体が明確な役割を持ち、地域住民が主役となりながら、各々が運営を担っている点に特徴がある。

参加の段階としては、地域住民はコースづくりと共通して参加 (i) から参加 (ii) に達している。地域住民は来訪者への声掛けや会話といった細やかなおもてなしも行いつつ、より積極的にフットパス事業に関わりたい場合は協会のガイド部会及び縁側カフェ部会に所属し、来訪者に直接おもてなしをすることで運営の一部を担っている。これは参加 (iii)「活動する」に達していると言える。更に、ガイド部会が縁側カフェ部会まで来訪者を案内し、そこで来訪者と共に縁側カフェ部会からおもてなしを受け、コミュニケーションをはかっていることから、参加 (iv)「パートナーシップ」にも達していると言える。

4.3 空間整備と運営システム

以上の考察をまとめると前述の図6のようになる。アソシエーションの中心として協会が統括的な運営を担いながら、地域住民が主役となってフットパス事業における重要な役割を担っており、さらに積極的な運営に関与する場合には、雇用促進委員会の開催する講座に参加、その後、協会に所属する形となっている。このように、各ステイクホルダーが互いに協力し合い、繋がり、一部

循環しながらフットパス事業全体を形成している。

4.4 フットパス事業から地域住民が獲得した成果

以上までフットパス事業の仕組みを考察したが、次ここでは事業自体に対し地域住民がどのように変化したかを考察する。地域住民に対し実施したヒアリングからは、フットパス事業を通じて感じていることはほぼ共通しており、①「外の人と交流ができること」、②「自分の地域を見直すきっかけとなったこと」、そして③「(フットパス活動の中に) 自分の役割を見いだすことができたこと」である。これまで考察したように、フットパスは「コースづくり」と「運営システム」により住民の地域に対する関心や主体性を強調させていた。これに加え、フットパスにより来訪者が訪れ、地域を歩く姿を地域住民が見ることにより地域の魅力を意識し、来訪者から褒められることで地域に誇りを持ち、また、自身でコースを歩いてみることで知らなかった地域の姿を知るといった効果が生じていた。

このように、フットパスのコース、運営、来訪者という三つの側面から、地域住民は自らの地域を見直し、より深く知り、「ありのまま」の地域に誇りを持つようになる。これらのことがフットパス事業から地域住民が獲得した成果であるといえる。

5. おわりに

5.1 結論

これまでの分析から、美里町フットパス事業における住民参加では「実感」、「協働」、「継続」の三つの要素が重要であると考えられる。

まず、地域住民が自らコースを提案し、そこを来訪者が歩くことにより、「自身がフットパス事業に参加していること」、又は「美里のフットパスを自身が創り出していること」を「実感」している。また、地域住民が声掛けや縁側カフェ及びガイドによる「おもてなし」をした際に直接来訪者から評価の声を聞くことにより、自らが行っている行為に対し「喜んでもらっている」ことを「実感」している。

次に、地域住民が主役となりながらも、協会、商工会及び役場と役割分担し「協働」しながら補い合うことで、地域住民だけではできない、又は無理なく行うのが難しいことを可能にしている。

最後に、コースの決定やコース整備、来訪者へのおもてなしなどを、マニュアル化せず自分たちの意思で、その時最善と考えたことを実行するとともに、来訪者から直接意見や感想を聞き、実感しながら適宜、改善を行うことによって、フットパス事業について「継続」的に考え、話し合っている。その結果、地域住民が集まる「場」ができ、事業に関する行為が「場」の存在により単年度でなく半永久的に「継続」して行われている。以上の要素により、フットパスにおける住民の参加が滞ることなく、進展していると推察される。

また、美里町におけるフットパス事業には次のような

特徴があった。美里方式の運営システムは人を巻き込む力が強く、地域住民は自然と運営システムの中に組み込まれている。つまり、地域住民は運営組織には参加してはいるが、来訪者に声をかけるなどの小さな行為を行うだけで、それは既に「運営システム」の一端を担うこととなる。なぜなら、運営システムには、フットパス事業によるガイド部会及び縁側カフェ部会による「おもてなし」の他に、協会や商工会といった組織には所属していない地域住民による声掛けや草刈などの「おもてなし」も含まれるためである。地域住民の中には来訪者と会話し、もてなし、自身が美里町民であることに誇りを持つことで「ばあばにも死に場所ができた」と発言する者も出てきた。

以上のように、美里町フットパス事業における住民参加に重要な要素と考えられる「実感」、「協働」、「継続」は相互に深く関係している。地域住民は、上記に示したように様々な場面での「実感」を得ることにより、活動を「継続」して行う活力を得ている。しかし、この二つのみでは成り立たず、二つの基底には他者と役割分担し「協働」することがあり、それにより地域住民に限らず広く他者との関わりが生まれ、会話し、評価し、支え合い、このことが全ての活動の始まりとなっている。美里町フットパス事業ではこの「協働」を基底として「実感」と「継続」を実現させる、優れた「場」が継承されていると言える。

5.2 今後の課題

本研究では「住民参加」について、特に美里町のフットパス事業を取り上げて考察した。しかし、フットパスはまちづくりの一手法に過ぎず、現代において多様に広がるまちづくりの場面で、本稿で示した三つの要素が住民参加の進展に関してどのように位置づけられるのかさらに調査・分析を行う必要がある。本稿ではその点について触れることができず、これを今後の課題とする。

注記

2013（平成25）年10月4日のヒアリング調査による、美里フットパス協会運営委員長井澤り子氏

2013（平成25）年11月10日のヒアリング調査による、美里フットパス協会運営委員長井澤り子氏

2013（平成25）年12月6日のヒアリング調査による、美里NPOホールディングス濱田孝正氏、美里フットパス協会運営委員長井澤り子氏

2013（平成25）年12月19日のヒアリング調査による、美里町役場企画観光課木村博之氏

2013（平成25）年12月26日のヒアリング調査による、畝野よんなっせコース住民

2014（平成26）年12月9日、12月20日のヒアリング調査による、畝野よんなっせコース及び小崎棚田コース住民

謝辞

本研究を行うにあたり、ヒアリングや資料提供して

いただいた井澤り子氏、濱田孝正氏をはじめとする美里フットパス協会の皆様、美里町役場の木村博之氏には大変お世話になったことを、深く御礼申し上げます。また、ヒアリングにご協力いただき、丁寧に対応して下さいました美里町の地域住民の方々に感謝の意を表し、本研究の結びとさせていただきます。

引用文献

樋口明彦・吉原真理子・高尾忠志（2005）. 既存コミュニティを貫通する地方幹線道路拡幅事業における住民参加に関する研究. 土木計画学研究論文集, Vol. 22, No. 2, 361-370.

平松紘（2002）. ウォーキング大国イギリス. 明石書店.

平野悠一郎・泉留維（2012）. 近年の日本のフットパス事業をめぐる関係構造. 専修人間科学論集, 社会学篇, Vol. 2, No. 2, 127-140.

伊藤雅春・大久手計画工房（2003）. 参加するまちづくりワークショップがわかる本. OM出版.

神谷由紀子（2014）. フットパスによるまちづくり. 水曜社. 広報みさと（2010年1月号～2014年1月号）.

厚生省（2000）. 健康・体力づくり事業財団. 地域における健康日本21実践の手引き.

熊本県（2014）. 熊本県推計人口調査結果報告 平成25年版.

美里町（2014）. <http://www.town.kumamoto-misato.lg.jp/q/aview/26/137.html>.

日本フットパス協会（2014）. <http://www.japan-footpath.jp/aboutfootpath.html>.

世古一穂（2009）. 参加と協働のデザイン. 学芸出版社.

谷口尚弘・佐藤翔悟・大友拓哉（2011）. 地方都市におけるまちづくり展開に関する実践的研究—江差町におけるフットパスマップ制作をとおして—. 日本建築学会北海道支部研究報告書, No. 84.

鳥谷部寿人・村上泰啓・高田尚人（2010）. 地域資源を活用したフットパスに関する考察. 第53回北海道開発局技術研究発表会.

Abstract

Recently, weakening of social capital has become a problem. So that the importance of participation is pointed out aiming a good community development, but there are many theories about specific procedures or important elements of participation. In recent years, footpath is focused as the experience “Enjoying the sight of appearance of truth of region” “Opportunity to review the region” in the context of community development and has been implemented in the whole country. Also in Kyusyu, many of the region are working on footpath, especially the Misato town expands characteristic it called “Misato method” and is working with residents. The aim of this study is to analyze the participation developing as the project is carried out focusing on footpath project of Kumamoto Prefecture Shimomashiki District, Kumamoto Misato and extract the important elements in

the development of participation from tow viewpoint of making course and management system. As a result, it is analyzed that the development of participating needs three elements “Feeling”, “Collaboration”, “Sustainability”. Local residents by experience the “Feeling” on many occasions, including the course creation, has gained energy that is carried out by “Sustainability” activities. However, it is not satisfied in only two, there is foundation of division of roles with others and “Collaboration” and occurs relationship with others, and conversation, evaluate, and mutual support, and it has become a source of all activities. In Misato footpath project, that method makes realize the “Sustainability” and the “Feeling” on the foundation of the “Collaboration”, it can be said that good “field” is inherited.

(受稿：2015 年 4 月 29 日 受理：2015 年 9 月 29 日)